３　江戸城開城から東京への行幸

慶応４年（1868）１月、京都で起きた鳥羽・伏見の戦いで勝利した新政府軍は、江戸城総攻撃の準備を着々と進めていました。しかし、薩摩藩邸での西郷隆盛と勝海舟の会談により、４月 11 日に江戸城の無血開城が実現します。

５月には旧幕臣らが中心となって結成した彰義隊と新政府軍の戦い「上野戦争」が起こります。新政府は上野寛永寺にたてこもった彰義隊に総攻撃を仕掛け、わずか１日で壊滅させます。

７月には「江戸」を「東京」と改め、10 月には天皇が京都から江戸城に到着、「江戸城」を「東京城」と改称し皇居とします。この時、市民に御祝儀のお酒が振舞われました。天皇は京都還御したのち、翌年３月に東京に戻り、事実上の東京遷都となりました。

●　江戸城開城

１２　太政官日誌（だいじょうかんにっし）　（第 11）

和泉屋市兵衛，須原屋茂兵衛　慶応４年（1868）　刊　1-178 号　22 冊　　東京誌料 1574-5

太政官日誌とは、明治初年の政府の機関紙で、現在の官報の前身にあたるものです。

江戸城開城に先んじて慶応４年（1868）４月４日に東海道先鋒総督橋本実梁（はしもとさねやな）、同副総督柳原前光（やなぎわらさきみつ）が勅使として江戸城へ入りました。この勅使により伝えられた勅諚五カ条が書かれています。徳川家の家名は存続し、慶喜は水戸へ退隠謹慎すること、城は明け渡し尾張藩へ引き渡すことなどの徳川家への処分が下されました。(21.2×14.7㎝)

１３〔勝海舟（かつかいしゅう） 山岡鉄舟（やまおかてっしゅう）宛書簡（あてしょかん）〕　［年不詳］12 月 17 日　１通　　渡辺刀水旧蔵諸家書簡文庫 3449

勝が山岡に、いつも忙しい時に申し訳ないが相談したいことがあるので会いに来てくれないか、と頼む手紙です。勝と山岡はともに幕臣で、江戸城無血開城に尽力しました。江戸城無血開城といえば、薩摩藩邸で行われた勝と西郷隆盛の会談が有名ですが、この会談に先立って山岡は西郷に会い、降伏の条件について話し合いました。このとき西郷は勝との会談を約束し、江戸城無血開城への道が開かれました。(16×24.5㎝)

１４　子供遊端午の氣生（こどもあそびたんごのきせい）　刊　錦絵　２枚続　　新収資料和-別 177

この絵は、端午の節句にかこつけて江戸城開城を風刺したもので、諸藩や人物が、着物の柄などの符号で暗示されています。向かって右側が薩摩・長州らの率いる東征軍です。薩摩を意味する籠目（鹿児島にかけた符号）模様の着物を着た子が明治天皇と見られる烏帽子の子の手を引いています。屋敷内には、天璋院（てんしょういん）と慶喜、天璋院に庇護されている位置に田安亀之助（のちの徳川家達（いえさと））が描かれています。(37.2×49.8㎝)

●上野戦争

１５　名所之内上野

歌川芳盛筆　古河屋勝五郎　慶応４年（1868）刊　錦絵　３枚続　　東京誌料 0461-C12

上野戦争に先立つこと約１か月半、慶応４年（1868）４月19日、自軍の寛永寺への転陣を求める新政府・北陸道先鋒軍が、同寺へ行軍する様を描いたとされています。この転陣計画は、同寺に籠る彰義隊の動静を警戒してのものであり、錦旗らしき旗を押し立て、小銃隊・大砲を引き連れての寺側との交渉は、彰義隊に対する示威行動でもありました。この日、交渉は決裂したものの衝突は免れ、決着は持ち越されることとなりました。(35.8×73㎝)

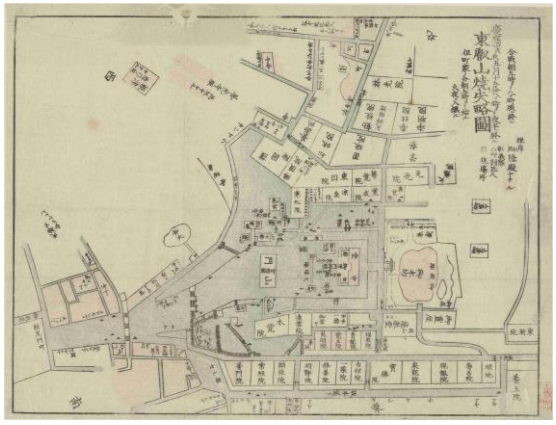
１６　明治元戊辰年五月十五日 東台大戦争圖

歌川芳虎筆　永島孟齋画　恵比須屋庄七　慶応４年（1868）刊　錦絵　９枚続　　東京誌料 1584-D1

（画像は９枚続きのうちの右３枚）

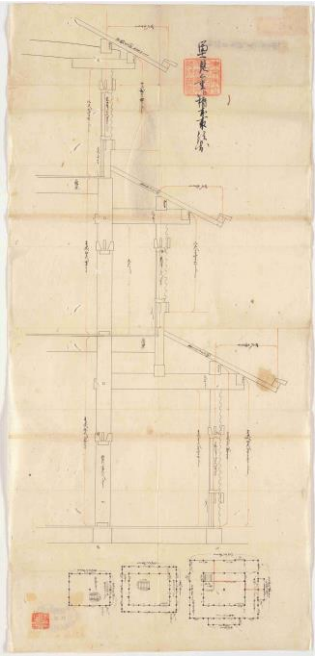
上野戦争の戦闘の様子を、画面右から左に、三橋から黒門を経て、山門、文殊楼、さらに中堂にわたって描いたものです。新政府軍が放つ大砲や銃の弾道が、多数の線で表現されているのとは対照的に、袴姿の彰義隊は主に槍刀で応戦しており、圧倒的な兵力の差を感じさせます。画面の右端上部には逃げ惑う町人の姿が描かれています。(41.9×248.8㎝)

１７　東叡山焼失略図　　刊　刷物１枚　　東京誌料 1584-C28



上野の戦火により、寛永寺の本坊や根本中堂など、江戸の庶民に親しまれていた伽藍の多くが焼失しただけでなく、門前・下谷・谷中など周辺の町民も多数焼きだされ、風景は一変しました（図面薄桃色が焼失範囲、▲印が彰義隊士の討死していた箇所を示します）。戦いはわずか１日で決着しましたが、大総督府側の死傷者が120名、彰義隊側の死者・負傷者がそれぞれ300名余りと両陣営ともに多大な犠牲を余儀なくされました。(26.6×33.7㎝)

１８　富士見三重御櫓本取絵図　　写　1鋪　20分の1　　東京誌料 6192-23　★



富士見三重櫓は、明暦3年（1657）の大火で天守が焼失して以来、その高さと威容から天守の代わりをなしたといわれています。資料名に「本取」とあることから建物を実測したものと思われます。慶応4年（1868）5月15日、大総督府による彰義隊掃討作戦を計画・指揮した大村益次郎は、夕刻上野方面に猛火が立ち上るのをこの櫓の窓から見て、敵陣が火を放ち退却したに相違ないと確信したと伝えられています。（78.5×36.5㎝）

●東京への行幸

１９　東京府中橋通街之図 其二東京府京橋之図

月岡芳年筆　年景画　丸や甚八　明治元年（1868）10月刊　錦絵　9枚続の内6枚存　　東京誌料 155-C12

明治元年（1868）10月13日、明治天皇の最初の東幸の行列を描いた錦絵、9枚続のうちの6枚です（左側3枚は未所蔵）。西洋式の鼓笛隊、騎乗の政府高官と多数の従者に先導され、天皇を乗せた鳳輦が京橋のちょうど中ほどに差し掛かかろうとしています。錦旗日月旗の旗手を相撲の力士が務めたことが他の資料にも記されている点や鼓笛隊の細部の描写などから、絵師が実際に見物して描いたものと考えられます。（42×155.4㎝）

２０　〔御酒頂戴〕

歌川広重（3世）筆　海老屋林之助　明治元年（1868）　11月刊　錦絵　3枚続　　東京誌料 5247-C13-1

明治天皇行幸中の明治元年（1868）11月4日、東京の反政府的空気を一掃するには天皇による「恩恵」を市民に施す必要があると考えた政府高官により「御酒下賜」が企画され、町々に3000樽の酒が配られました。各町は趣向を凝らした行列を仕立て、お祭り騒ぎで分配所のある府庁から酒樽を運びました。画中の酒樽に実在しない銘柄（「世直し」「天下泰平」）があるのは、乱世に辟易とした庶民の切実な願いを代弁したものと思われます。（36×72㎝）